丹鶴叢書

草根集 十

和書門 類
二九三六四 號
一〇八 函
二三 架
一五四 冊

内閣文庫
和書 類
二九三六四 號
一五四 冊
二一六函 二一 架

内閣文庫
番號 和 29364
冊數 154(65)
函號 216 2

国立公文書館
National Archives of Japan

草根集第十

享徳九年正月朔日試毫とてよめる

春神祇　あきつの神世のまゝふまその神やさらにみよしのあむらぬ

春釈教　梅さくらかつちる神もさもあらず法の花の匂ひそらにけり

春祝言　をさまれる世にはる中にも立かへるまつしるき御代の春

五日武田大膳大夫信賢家にて續哥の中に

初春鶯　望も山も霞をまつの木の葉にやまだ鶯のおとづるらん

逢恋　今秋風吹けばなほせの山つゆかなしくかなしきなみだ乃空　一本雲

夕雨　うかせくる夕の雲は風のまにまにこの下もなく古への雨

六日畠山修理大夫入道賢良の家にて續哥ありし

都霞　百敷やものふりまさるたき袖のまほに綱も霞あらそふらむ

寄枕恋　人もとへ落る涙の流まくらおもふ実ある夢もみえん語

山家燈　いつ里ふかなる近ぬ星と人のみんまの庵の窓の灯

十一日将軍家より手書をしふ当君出させ来まへむとぞ

詩おなとかさくと仰られしみまくまみもやし次ふ

一そへよみく書付くとうけたまはりしをみすられける

みく筆のまゝの跡侍しとぞ

まよれ君がみけとおふせごつ我むの手も柳やのまん

同日三宝院准后〻賢御会始に

初春祝　むまひくし杵も久し若菜まちをもえむ法の若水

十三日式所より読おくられ侍

早春　いまを山あの霞の衣ふゆまをおもへば年もへだてし

原雉　雪きちる萩の下露の羽の色もぬるやきぎすのおりはまさせく

厭恋　そむくとく雲よものゝは侍そらん深る夕の人のまゝを

古寺　秘密の衣はかくよ七十に杉二本のあさきのよりむ字

十四日小笠原信濃入道浄元明栄寺といふ寺まく

月次のとみせられ侍

立春　春も此のむらそしむの跡より春ぞ神くま世なるらむ

夏草　山深く入はもて夏きの下草さ世とさる風か

萩風　萩のやうきいの露おもし杉いひそぬ風のおとかな

逢恋　我ためにつらきるその面影をまつ逢ふにかへて嬉しき

眺望　幾代のさゝの糸はいとゞの世に経りける有る松

十七日滝川右衛門佐義信家にてよみ侍りしに

早春　暮りくる霞の下の雪消えてみなるきる乃山川

帰雁　越の海の波に鳴きる延の旅にくるも人の羽風とそなる

寄日恋　夕暮に松の風やかはりしもちぎるるのんくくへき

古郷　あれし里ぬしのしるしそ松も古てしなるのほかり武庫の子しも八

十いる大将大夫の家乃月次をしめに

柳辨春色（當坐）　あをやぎの糸もとしらく門にさくそ世の色よりて咲八（や 类）

湖帰雁（當坐）　帰るかりしまの浦の浪とめて帰るさ入ぬ鳴る乃うら浪

学柏

時雨暗　定めなき時雨に雲ふかるをきもとゞまるたゞみちの月（八 类）

寄苔恋　埋もれむ苔の下道ふみわくさも人はあらたまつゝの名風

鶏告暁　やすらはて鳥のねの月にまたつけるぬるのよそ

廿日草庵の月次ならし

閑中春朝　長閑なる世をもとゝもなき鶏鳴世をはなれそめ

立春霞（當坐）　山のものゝ霞ははえぬやちらそゝりつゝよしおほる雲あかん

夕立風　ゆふたちの空のかくもまれかくの山せきなし夕立ちの色八（て 类）

寄風恋　のもるものりなきたのむおく床のちらい風八ころも（ぬ 类イ）

川　廿二日従堀大夫の家の月次ならし

水のあとに清のしるしたもやめる世に絶えぬあふ川瀬（もつ 类）

侍早鶯 梅が枝はまだ一枝も花おそし鶯さそへみねの山風（く类）

當坐
霞 浪よりも霞のおくの浦人の入江もみえず春日をぞさそふ

早涼至 身にしむる程こそなけれ萩が末の日影とともにふく秋風

旅泊夢覚 松が世はさぞやさこそは浪の枕にかくまぎれ行むしあけの夢

廿四日細川右京大夫勝元の家の月次に

毎山有春 民のため出しより世におさまる宮なきさちの霞ハ（そ类）

當坐
初春霞 千世の春をやかれてみするや新たなる松に梅がけ霞ぬらん

寄嶺恋 ぬるうちの浮の水のうきみや枕にかりて夢さそふらん

浦鶴 松が枝の河の上に翔りつゝ鶴そいるまの浦の名なき

廿七日右衛門佐大光明寺にて月次始まりしに

春色浮氷 色浮きせの緑とうかへても雪の氷にまた残る

當坐
野鶯 鶯やかくておもふらん霞む日に末の野べの糸の乱を

寄遊女恋 うかれ行ならぬ舟の契ぞおもふぞ待ぬ日もなし

暁述懐 よよ経るうき世をなげきとも空に晴の月は宵の山のは

二月五日三井寺へまうでける所にて（侍るうち 一本）

初春 山の名の千世の坂をこえ行く末遠く霞むまちの春

江上霞 まのゝ浦入江のむかしの袖にかはらぬ霞なるらむ（の类）

遠梅 我宿に移ろひしあかず梅がえを吹来る風は遠里人

梅匂 一つなるまでの小妹の羽風にも匂ふとちらし花その梅（川セ 类イ）

柳 宇治の川の水の流れて桜その根の深みとぞ見る

春恋　いたつらにかくくらしつゝをとめこか花のつまこの山のなかめそ

契恋　かはしつる言の葉風にちらしてかなしきはおもひのつまとそなりける　小異

逢恋　稀にあふもむかしにかへるむつことはうきまくらの波のまにまに　と異

寄鐘恋　へたてなくこよひはかねの声きけはうき身のこゝろつれなくもなし

関路　よろつよのかたみのもみちいろそへておほさかやまの関のゆくすゑ

山家嵐　まくら　冬　よるの松をとも子やまのかせもたえぬやうらみぬ様のあかつき

旅宿曙　太山路や暮行宿をたのみてねにかけるほとゝきすのこゑさめ

湖　みさゝなみかゝるものから葉分のなかれんたかの海のなかれ　の一本

十一日修理大夫の家乃月次に

霞隔山　雲のうちに消ぬもさえてまさこの山のさくらそかすみこめたる

牧春駒　草もまた古葉のいろををしむ駒のもさへ栗栖の野へはなれかねさ

海邊雲　浦ちかくむれゐるあまのみるめや友ならん様をかつ沖のまし山

當座
霞隔行舟　行舟のこしのうら浪消くむろの一木そかすみはてる

寄月恋　ゆつ人の俤なれやほのかに見えぬ月の影そ身にしみる

鐘声何方　おもひ消ぬゆふ暮のかねおほかたに出る声のゆくゑ雲の名

十四日家の月次に

霞中鴈　春くれもかへる鴈か村雲あとまた消くゆくなる

雨催花　ふるもよしさかぬる雲のしたゆくむらさめは山さくらも　小異

當座
和詞恋　あはれしらくさの風ふきこそのたよりとも

詹梅　梅かえはその名もしらぬ鳥か鳴東風のをとる軒のはる風

恋後世妨　秋の霜こそむすふ末の諸ちくも君にまつはる身となりなん

小篠　いくよまた小篠のかりねの夢に風もやとりて更ぬらん

十七日細川上総介氏久家にて月次始に

梅有佳色　咲そめし木々のかさしと春ぬれはやと（やと 異）しめむ梅の花の匂はせ

（當世）遠山霞薄　浅緑かすめる山の松杉もおほろにかすみさえたる（また 異）雪のけし

寄原恋　秋風のよそにてきける涙あれは契し人の宿の浅茅河

浦松　思ふ事もなくやかくらん浪にまちる松のねよせて浦風そ吹

十八日修理大夫の家にて聖廟法楽百首中に

連峰霞　空晴て峰の雲やたつらん（や 異）遠の葛城の高嶺

蚊遣火　すみかよりあきかにたつる煙に夕暮そある小野の里（宿 異）

野月　月も又雲ゐの外のまさこ地は分入もかちの尾花の露の上哉

岡雪　雪積る岡の辺をとめたにおほろに見ゆる雪の色の松のけ

寐覚恋　さへやきん覚さめまほしの夢路をは覚ても眠にたえぬ恨を

村眺望　すゝきえも見ることもなし大和路や里もむらある武蔵野の原

神祇　百敷は神のうけめくみのよりてみんのうろ乃いとのちそ是

廿日右京大夫の家の月次に

梅薫　春宿をつゝみてにほふ此比の芳はにほひて梅そまさる

契恋　玉ほこの道行袖のちきりとはたえんせやよのちきり絶らん

関鶏（路関 異）　杉やまる弱のかけにる坂の清水にかゝるの声

廿一日菊亭にて人々まゐりてよみおくる時に

関路霞　ふるさとの人のこゝろもあふ坂の関ちかましくかすむ山かな

採早苗　ぬれころも小雨のあさての玉たすき夕日とかけて早苗とる也

月似鏡　秋とへはくもりなしさくまかへて光のかけぬ月の鏡は

見増恋　花のいろも盛なれはおそきぬるをとこそ思ひさためる袖のなみた

窓前竹　呉竹のたちならふ窓のうちに小枝切もてむすふ山家

廿二日草庵の月次にて

落梅香　梅のちるもうつり匂ふあまき風君もあつまるもみえぬ雲に

春月出　むら雲の墨にほのゆく月にみし世のなくしつくやはある

恨身恋　さめてもうき身をこそ鳥のこゑつけたてしくあけし暁のかたは

当坐

落花埋路　夕嵐ありしゆふへの花ははなくもさらむ道をつむらせ

餘寒霜　くれてむすふぬきおく夜ともえきえさの霜の朝風

山家恋　恋をして岸の宿のまゝにまかせつ山のおくの家

名所濱　打よせし荻の葉なる松なく松浪寄あらき濱風

廿三日大光明寺の月次に

月前梅　いとまなき梅の匂ひをとふにこそめて雲ちるを待る月影

園春草　若草の花咲そのゝ袖ぬれもまさる心あさき露にぬれつ

当坐

適逢恋　いつまてはあくまちてん心やるさへひさしきにめくる月日と

連峰霞　流れりし嵐の峯にかさなりて流くる雲のかすみの峯のかくし

寐覚恋　ねさめしに寝覚の後の涙そふ枕ならする袖の面影

海邉松　住よしやむかしの岸の松かはをいかに波の音にまさる濱

廿六日三井寺五智院甚兼草庵にてよみ侍しに

鶴若丸といふ小児のもとにて人々詠歌ありしに

朝翫花　山路行袂は匂ふ花の枝を折かへてかざさむ

適逢恋　よひよひに待ぬるなかにあひぬる夜そうれしき

遠村竹　みやまの鋼竹もむらむらにあるむかふ八里としもなし

廿七日赤松刑部大輔教貞の家にて詠歌ありしに

春風解氷　流れゆく水の氷を越きてもいまぞ解ゆくはるの川の世

憑誓言恋　頼みしも言のはるめてたのまれし人のちかひの深きにして

山遠望　遠くともすみそむるみ山の沖つ白山

廿九日宮道親忠八幡法楽とてすゝめし中に

初春天　神代にも変らでかすむすめる天の原をけの空〔ふることに　哭〕

欲春暮　ゆくはるのをしむ花の鳥のねの月の日数の限を

寄桂恋　まちわひし月の桂の花の枝は世にうつるんありとも

寄夢恋　ぬる夜にみるのもとにて今宵もさよをむすびて明しこそ

嶺上松　八幡山おひそふ峯の嵐やもとのまれまる尾の松の世

晦日平頼資もとにて詠歌

早春海　わかくるるもとむるあまの海辺をそれとなき霞める

寄鶴恋　忘れもの句ひしもの仲を雲ゐの鶴の声にてとゞく

旅泊鳥　汐さゐまかもめ鳴ゆく湊舟月まちなく夜明ぬ船をこ

三月四日右京大夫家の月次に

古寺花　ふる寺もむかしの春の京の跡の花は緑もきゆる山かな

花梢　時しもあれ落る梢の花もちるみよしのの月のひかりなき錦にぞ

花色　紅のいろの深きにこえて花の袖しかさねし日影のまま

花漸稀　散ぬらん咲をみしものかへりきてや残るおもかげ　まどもえん类

五日修理大夫の家の月次に

海邊春曙　霞ちておきつしほ風に匂ひぬるものあしのゆふめ

花下送日　あまた日を消しし类むらんものは日数つもりてもの長し　う类一本

時々見恋　つれなさの侍りのく世三日月の空も又くるみかの夜

當坐
社頭花　ぬさちらし宮る神のまうで坂を花は様々にちの山ぞ

花錦　またちぬるもの錦まてつまさてたつまもあかちらさんもな

花匂　紅に匂ふとてみし菊のませならむかかるむらさきの

六日上総介家の月次に

二月分
河新柳　湊河きしの舟やとまるらんかへるある浦しほの糸

二月餘寒　さえかへる空の桜も雪とみるまで咲ぬる二月の空　そ类

寄関恋　人しれぬみ我も頼をあふさてなにとせきもり守らん相坂の関

當坐
花枝　風ふかく日も暮れて咲きしむの枝もたをらぬ匂ひにほふ

花根　あらたまの春を忘るしるしにはそれもその根に帰る

惜花　風にちる花を一日に惜しむとも月はまた

十六日細川右馬頭入道の家の庭桜さかりなるに

とく一座あそびしに

夕　花　暮深の夕ぐれのにほひもにしられて花の木の本

春忍恋　しるへしも（類）なくはみえしかと人の空のひめ延もなく縄

春釈教　待をしみ咲ちるものありてやりのさとりの契なるらん

十宮明覚るの月にて

月前落花　出る日の月の桂の花ともちる雲のさくら嵐ふらし

夕蛙声幽　夕川やなくこゑ清き川水のうちにまつの袖に

船中夢覚　大船やゆく（の類）のたもとに涙の上に夢のうきみる乱れて

当坐

曙　花　ひさかたの鳥のこゑ清きにたえなく花に見えし山のむものかけ

春尋恋　とめぬるか霞の中は八折あまて侍るに花のやまさと

春田家　風寒しもと神ちの雪とけて春の苗代むせあたる小田

子祐

廿日石橋左衛門佐祐義山荘嵯峨小倉山のふもとなり

西行上人あまた桜のと詠まれし庭にある花より古く

まうできてみし半四十年にもなりぬれど今は風

ふけしくよそなる木のやうにてもあれこそ二本をも

しし一日詠みて侍る津のうちにのをさとりても

山中櫻　あしたにも咲ぬ嵐の山櫻花のこゑき花のいろのちらぬ

水郷櫻　うつせの咲しになりてさくらも咲や川への里のたつ雲

杉間櫻　みわやまの杉の尾上の桜も我侍るあまた酒宇の月

廿一日大原野の花ざかりなりときこえて修理大

夫入道さそひ侍りて小勢を初とともに出て西京

ふさと法王寺にて庭の花とて人々よみ侍りしに雨
ふりければ先雲林院にまかりしに其観音寺に
むかしなからの営勝院の上座なる海印寺とて
すめる花のもとにまかりてあそふほとにたくひ
侍りし事を思ひ出て後広経僧正の時常に
申侍りし真保坊にて侍るを尋しにこの僧よくて
みしにもあらぬ人すくなくの事なくかるを出てあ
まほに侍りし跡を尋て遠江に入て雨のふりし
花をみあはれにし吉野にて宝幢の坊をたつね
りけるに花咲さかりなる大乗院の前にて

さるまとみえくかしもちらは雨中にこそさそくく
く讀家の中に（傍し一本）

寄雲花　侍出る日の川上の雲さらに出来かすや花乃八重雲

寄錦花　さらに咲花の錦をあらはして入江の雨の露のたての紫

寄花別恋　人まちて花の別はいつるのやとるにぬ宿のまち風

寄花眺望　こゝろ家にてもむかしの事をこゝろせん（一本哉）世八千里にまかむかしの縁

廿ろまて修理大夫の家にて庭の花盛になりしと

一讀あはれなり

尋　花　むかしの花の袖に句をさくる心まかまかにしをきての笠

花留客　やとりの人花のこのまに心を翁に桜をもつさき松風の

花散春閑　山のはに残る嵐のおとさえてくもゝの幾日ちるらむ

廿四日小笠原備前入道浄元因みしく廿五日湯山に

詣侍る道の間おもひつゞけしうた

氷すゝ川みなくちまゝに山せまるもの見さえさえるわかれ

あまねく所に至体あく

さしまのや浦なるあまのさるめにも花の浪ちる山桜かな

其里つきぬるに入あとにて昔能因法師住たるに

身まかりし時見はみしおまへものするかの草紙

などを書とく埋みけるとて因雪に塚のありしかど

其ための湯に入し次に尋みし時なまにや阿弥陀一年もと

それよりあつかひそれよりあくの竹垣なとしける所に

ちひさくあつて能因か家の庭なる一しくものなり

庵室ありていくく人住なりて

むかし人聞つけに埋むおもひにしのの杉を植ける

あくた川をこゆるとて

ちりもあるひまにあくるさとぬなるに迷ふ塚おきその川瀬

影ほのかやに一本あれし侍るふるしなれさくまゝに

ろまかれん

ゆきけしまくよやいくん舟をぬ柱見くあらき世川波

なまの世川を武庫山のふかきまくまとしむく川とよこ

みこゝろさむゑふうその河ふなの中流を我渡りかゝりぬ

舟坂のしたよりを越てなゝちかき湯山のみさきぬ

ゑふさの末の出湯の胴さへまやこそ草も霧消らむ

三月おなしなる日とて読ける歌よみし中に

早春山　霞みつゝまちさへいまた桜すくえや雪さむきそのみの世

深夜梅　梅かえも霞める月のさよふけて星ぬるやさしみえしん

松上藤　かゝらおもかの手綱は松かえのいくちまき緑の松の藤波

橋知昔　古里よりえみしちのかの橋はちぬむしそくらすかは

外山月　遠方のあつては秋深く月のあかしの嵐にあらそふ

歳暮　たつ民の市ゆきすむるあかつきのこゑもおとぬるさとの鐘にも

子健

立名恋　川のくはえのむなしなかぬまにたゝせなのうき名の立綱のふ

蕭寺鐘　おちつくるてあきぬをとぬ谷深き出湯の上のはのかの霧

卯月七日徒然の餘四人百首よみし　浄元　正慶　正般　愚身

初春霞　山の末つ深く霞むあしたまさにむしろなくはちらぬもち白ふ

門柳　深くなり枝さく門のふる柳めくむ末のちかくおもとかう

故郷春月　里ハあきらぬふるさと世く住るるいく月やあまの月を残さん

見花　さやかなる色とこそ見れ桜もさぬ世の末とて思ふ風に

惜花　をしまんやちりぬ桜をとはいふ名のゆのむもの花の風

三月尽　さしよのちも月の果を見よてよも深き夏の今のむ宵

五月郭公　雲ぬちくなん山やなきさ五月やまつちゝる音にさかひなき

夏草露 しけりしあ野をしけみおく露はらふ葉末にたへぬ宿哉

遠夕立 山本の杜の一むら色清くまださき日影よそにゆふたち

初秋風 くもりし御袖にあさちふの露をおきける秋の初風

秋夕 ことのうきのさひしさハむかしまつ人秋の夕暮

山初雁 越て来る山の峰の上にたつ雲清く千里の秋のこゑそ木

谷月 雲そなき谷ハおそくてとちハ谷の戸を明ておくその月の影かな

湖月 さゝなみの海や影のみ空とてさそふ汐まつ秋の夜の月

紅葉映日 色そふも秋の日影にもみちハさらにもみち山のもみち葉

庭霜 待人ハよもこのかたに村雀ふる絶し庭の夕霜

暁千鳥 風さゆる河原のまゝにおのつから鳴やみきはの宿の白石

常盤木雪 枝おもる山路の松の木のはの下嵐にちる雪のむら立

寄雲恋 絶まなき我中の山ほとの雲とのみ立まよふらん雨の跡

寄烟恋 語らひもとはぬを室の八島なる我思ひの烟たえて

寄松恋 人もとめて恋のさかさまやぬ松の老木に我や成らん

寄橋恋 古をそのあとをかくもかく絶しと他にいふ夢の浮橋

寄宿木恋 誰ちかひむすひし松のこすゑの風の中に

寄初草恋 問もしらしと思ひ公をおもふ草の原の枯野となりなん夕を

窓灯 あまたのたる窓の小夜なる星月夜文灯火をかゝけて

橋雨 ふる雨ハぬれてかへる木の下の雲にくもる此板橋

旅泊 浪まさへ我舟たよ湊川夢をさへ世をわたる

山家鳥　里人ハ我名もしらぬ太山の鳥の声も聞し

老後懐旧　かそふれは武坂すゑし君間ふむかしもまハ老の身なりけり

祝言　あつけなれも絶すかゝる東ハ君か恵をうるの神松

湯山法楽ハ三輪明神にて法楽し奉る

郭公一声　郭公なく夜の月も二声となくて過ぬる杉の久の世

水辺納涼　涼しさを風にもまかするさゝ浪の木の下まても滝の白浪

故郷恋　難波女か里のしるへの煙にもなひく浦舟よるとハなしに

関路恋　逢ふ夜ぬ老を月影の関の戸にかたひとの真の宮

古寺暁鐘　わすれぬ夢もあはれにも残る鐘の声をさそふ

湯山より卯月十七日帰洛ありし同じつくさし

おなし年同廿日醍醐にて侍りしとき

谷餘花　夜来くる茂れる谷の埋木も人にしらるゝ花の下陰

立名恋　晴るへきこともちる清はしや浅ましき嵐ふくらむ

廿三日草庵にて續歌あそひし時

餘花　夏にみる春のなこりの咲残る山桜哉

暁蝉　暮る日ハ木のまかくれに鳴蝉の声も村梢の声

寝覚恋　おもひねの夢の俤の寝覚なるぬときもる涙かな

河鳥　白妙のなかの上の川風にみかのかみハむすふまもなし

五月十二日日野中納言勝光亭にて法楽として

もとめられし

岸柳　柳原有り岸の浅緑出るも霞むきさらぎの川なミ

山家月　入かゝるを見る里人もおかしからん家の窓やよ月のかゝる

松雪　雪さゆるかのへの松も下をれしゆるし風のちるゝに

逢恋　あひ合ふ夜ハ夏ふとも我身をもちかへまた逢事をちるゝつまなれハ

佛寺　詣よもかれもぬ寺ハさ夕ぐれて古く流れて荒れたり

十五日修理大夫の家の月次に

新樹　茂るのかゝらぬ我の蔵をまもる一木あまきの梢の色

初郭公　まちかねぬ初音の夕の訪ふ是より又やゆくむの鳴

蕭寺　みせかへさ山寺の坊の垣内に松杉かゝる水をおもふ

當坐
行路夕立　道の人や笠のかほをて鉢まつ小雨さへ吹くゝ夕立の風

隔河恋　川みよおもひの年やとゝ人みをまちをへの舟のあさ河

氷郷鷺　飛鷺ハさしてる布ふる清く白さやさき流れの川島

十六日右京大夫の家の月次に

山霞　やまと高き家も深くむかし山に雲たちおさゆるさか

花盛　あか月の其よ尼天津乙女のた袂ハ匂る花さかり

千鳥　濱つらをちそへてゐる浦千る夜の霜も松の月

寄星恋　うき名をもたゞしかの星月秋をまつそ俊頼への通路

古寺　あれせぬくの我よ松木こゝたてなきの寺のむしめハ

十日大光院の月次に

五月雨　降らま風よ三葉も下折ぬたちぬの浮のさみだれの几（の葵）

螢　みる螢あまた楢の葉よりすゝみて句を記して出ゆく

窓竹　竹のそのよ毎(む歟)ふきくちある程ハ窓の新しさを完くして去る

軒菖蒲（當坐　軒歟）　風ふくる野のあやめの露ぬまを軒むかさすさふの影

閨中扇　かくほしの風をさ閨にかる月の影も扇のうちに涼しき

寄涙恨恋　うきをしる涙ハ何の偽りあるへきのきさひし人ハかならすとも

薄暮松風　下荻の色ひそかにきこえてとりとて夕ぐれをやかとつゝむ松か枝

十九日修理大夫の家にて會始ありしに

寄巌祝（歟ナシ　當坐）　さゞれ石もなかぬ岩ねの千世をふるしよりみてはいつの世かと

見花　霞かくる花の色あかふしきには口つゝみてみる花のい袖かも

初秋風　七月のまへにかゝる分ゆ(り歟)宿しぬるしもたちくるゝあれの袖かせ

字補

夏恋　宮もなき世中のもとハかへるらん人のかくそさりける

河鳥　河おもてをさゝなみたてる鵠のくゞる翅に雨のたまちる

廿日に家に尾張にて讀哥ありしに

雨中新樹　若葉まさる雨の葉にふきて涼しき雨にまされる山をさへ(みえ歟)羽衣

寄濱恋　かさね稀つる契むすびし時より又うらみのあまの羽衣

隣里雞　とふくゆるのたえもちゞやかにむらつくあかつきの声

山家氷　谷深き水かれてゆく宿に又つまりかなる夜あらしとも家

廿つる山名氏に於て浦鵆教之家にて讀哥ありしに

早苗　芹つみし沢田のあとに又ふれるやまとの苗の床を洗ふらん

被忘恋（ナシ歟）　忘れぬ様しさらにたえて涼る涙ちゞの思ひの枕かせ

山家人稀　我ならぬ人の心をおもひやれて家は山にむすふ人の心にそ

廿五日草庵にて小宰相法楽千首九十首の倍る五十首の中

早春氷　かはや川は谷打とけて岩の氷や神の人たのむらむ

暁納涼　涼しさは雨に露たる袖なから芹を野中の風の下道

湖上雁　さゝの海の夕霧ふかく声たてゝ秋風いそく志賀の京

湊千鳥　湊川こゑする千鳥も[illegible]は浪や氷る鳴きなくらむ

見増恋　いやましの思ひにみるめをかぬとやうきなる恋の涙ならん

暁懐旧　忘られぬふるき昔の面影を思ひかへるもかゝる暁の空

廿七日修理大夫の家にて

深夜鵜舟　舟人の袖にまとふるかゝり火も更て深更の川風

寄木恋　山川に流るゝ木のこかるゝもまたうきてあらはれぬ[illegible]

暁夢　唐土の野へにまよへる枕にも覚めてかなしき時のまよひに

六月四日右京大夫の家の月次に

海霞　ひさのかすみやなひくも果しなき浪と雲ゐのまたつもりて浜

島螢　夏刈の汀のあしの末見えて螢数そふなにはの江のかすみ

秋時雨　秋風の涼しくなるゆふへの袖をまた染ぬに時雨そ

寒草少　ほとゝきす庭の芝生の霜の上に一本菊の枯やしなん

旅店暁　鳥の世は旅のやとりや[illegible]へ夜るゝ門出[illegible]

五日修理大夫の家の月次に

夏衣　けさは夏の衣も[illegible]風のいとまある日も

鵜川 夜舟のさしはへてくる篝火はなほ底よりや夜川さすらん

述懐 くみしらぬ河のなかへ大海を一貝にとるためしなき哉

澗底螢火 谷川のそこにこもれる螢のうもれ木朽やはてなむ

恨身絶恋 身をとかむ我はしのびに大焼たえぬ胸のなかりし雲はおもはじ

山寺懐旧 山寺のみのりの声をきゝしぬ世のことを語りしを思ふ

七月草 庵によく人まつまつく寝覚さへあはれしに

夏雨晴 さみだれの晴ゆくまゝに夕日影さす軒もとに涼しさをまつ

松下水 松かげの下ゆく清水さぞもふかきにあはれいかなる山もとをゆく

窓火恋 ゆふべの簾をもしのびにかゝるともしのかげぞゆかしき

窓前燈 ともしびは窓に光は夜もすがら消やらぬまゝとおもひしられて

八日刑部大輔の家の各月の月次にて

橋上螢 川ちかきよこぎる橋はかゝる螢も浮て流る江の橋

泉忘夏 岩間よりもる泉のくみてまなびの風ぞなつを忘るゝ松の下かげ

面影恋 俤は身をもはなれぬ頃よりくらくこゝもとにそれの夢の面影

卯花 山やまも秋葉にまつらん木の下のうつきのゆきの花のしら浦

窓葛恋 玉のつらかゝく我世の秋のかぜをうらみてや下葉涼しき

水鶏 難波江の浪なるものはまたくよみしやあらしさ

十日右兵衛佐の家にてよみはべる

沢夏草 世をわたる寺も名のみの水絶て夏草茂き庭の跡

沙月涼 さそふ河瀬なりけるそよそよ涼風涼し夜の月

市行客　旅人も遊なる石をよく宿を結ひもせぬ市のまかきを

當坐
盧橋　風さそふ花橋を志のふしくおほゆる雲の袖のうつりやせむ

関路鶏　志らぬ夜の三田なきこえて関のゐる志ら鶏や人の志るさかなん

十一日清水寺等坊円秀月次あるに

氷石契久　岩せきもいくよの水よ口くちの数をかけ志らさ乞えをきそん

當坐
霞春衣　若ハきその霞の衣きる人も霞くの日やぬきかへるらむ

聞擣衣　うつおとにさハあくとも山と雲みね袖をえてさくのたもとやきん

竹間霞　まだきふかつれ竹やおかるらん霞の末をとる窓の呉竹

寄海人恋　ふかくなる浦の底のためいさハらかしぬ延せよつくし口さうハ

田家鳥　なきぬるや稲おほふるの宿らん待とよむ山の末の刈田よ

十二日東遊堂盛阿寮にて讀ふるあそひに

夏雲　雲まよふみなつき日は梢ハとめくるも夏の照日の下にやさらくん

夏鶏　おのか尾を花とや思ふらん夏草の繁みにまよひし宿の鶏

夏馬　かれ草山やとくにし駒のあせ草とみ野ゝの六月のころ

十二日大膳大夫の家にて讀ふるあそひに

籬卯花　山住の垣根のまかきハ白妙に咲く文字をみす雲のかのむ

寄雲恋　いとまなみめくるぬるさの夜は雲井のかをとあかつの思を志つくゝ

名所橋　おもふちや瀬の袖と近つ川の橋ハ口さらし浪をもしき

十七日上総介の家にて讀ふるあそひに

花留客　あくかれ花よ宿とて帰るさそふ嵐の水やさこのなるらん

江上蛍 誰がよするハ蛍を彼方に乱れて江に玉まくらん たる类

夜恋 よるの夜の夢も現もなくぬるうちのまとひつくしも なし

島鶴 たまの島ふりしやすきあしのころ島の鶴の毛衣

十つるある所まで一座ありしに

嶺上新樹 つもる山の茂りてさえていりの川に流よる落とみつめ夏なる

人惜名恋 我の名をしたたやさえうつ人の名を残さじとしめさきしのめ月 て类

山家夜嵐 山深み夜の嵐の峯ふきさのみ夢ぞめざめの杉の枝 夜类

旅行重日 さすらう日数もいくとなりぬちつるらん古への床

廿日草庵の月次なりし

蓮 かかる池の上の露や袖濡れて濁りにしまぬ心も白からん

扇 月さそふ扇のかぜは夜る人はいかにやつもる秋とこそさん

鳥 类ナシ 夕暮をまつ今を白鳥のむらむらきせと誘ふ山風

急早苗 當坐 公念类 ゆひよりて苗や湊のさなへ取りめて汐やく延ちて稀なる

絶見恋 影とめよ雲ゐの月をきこの涙袖にまくいつく川かな

朝夕眺望 上类 海山よ月影を隔てぬ思ひあひぬ朝夕雲の路る山常

サうる文サうる尾も人の来まさく

首夏 花よりし名月の夜の月にそふあやまちの句ひかたん

照射 照たのめかゆる火の影の杉に山に流す廉の高の矢を

恋枕 山となる枕のちぎりの二つみへふつる雲をむすびつつ

絶恋 忘らるる山の世のさつらゆくさこやたものことも誰て

島鶴 かへるらなりてをまもて唐土の月をともみるや秋津島路

七月五日修理大夫家の月次会

初秋松風 たなばたの雲路秋立つ音にぞかよふ宿の松風

霧中聞鹿 さをしかのよるの妻ともうきまよふ声ぞ鳴くや霧の秋の山本

契明日恋 あすみなとらんたのめおきしを飛鳥川ありしよ世の間瀬ならば

當坐

秋暁 涼しくも秋くる西の山の端にあけぼの見えし有明の月

秌獣 山田もる庵のたく火におどろくや鳴くしかつらき秋の伏原

秋衣 くもかさねむこの嵐川舟に秋さの夜からはなけれども

七日同家にて七十首読哥の中つゝ

七夕月 天の川わたる月の舟なれや別や星のかちつくらせむ

駅路霧 めにもみえてあるとは知れるしらぬ旅の野辺の宿の空

寄苔恋 恋ならば涙にはなちんなる一の岩ほの苔にもさぬとも

澗戸雲鎖 龍田川ちるもみぢばをとぢこめて谷の雲のたちこもるらん

十七日右兵衛佐の家にて読哥あつめしに

新秋雨 うき袖にくるとはなしに人あや秋も夕ぐるるかな雨の

尋不逢恋 かつるふむなき跡のまことにも夕の雲のかくれ里人

寄月釈教 (类ナシ) あふけどもむかしさらにまさりゆくをまもりて月をまさる人をも

千あまりも所のあさつきふかく言のよむ人てあつらへ

初秋風 木のなかはつてをとふてもあまつる光その杜の秋の袖かせ

寄秋恋 (小类) 露ちらふ秋の袖にはそのうき秋をしのびかへしも秋の一間ら八

暮林鳥宿　一枝にやとるとりのねは庭の林もいかにせん

修理大夫完家卿家をかせられて亭に贈られし

うたよみしよりきこしめしける

夜鳥や山道さしてかへるらん天上天下唯我獨尊

廿日草庵の月次に

草庵萩　風さへもふかくはらぬ萩か花よかへて枝をたちぬ庭もせ

蛬思深　蓬かくさの宿にもなく聲ハあはれ虫の聲のあはれなる

移香恋　なにさそふ心も世し袖のうつり香も身にしむころの月にやとりて

當坐
遠擣衣　よし野山あさの擣衣うつや里の嵐に

寄山祈恋　初瀬山ちかひの中せて我ためになひかぬ人の秋なしくるゝ

河鳥　むら鳥ハ岸まてむれ柳ちる秋の川せ

廿三日大膳大夫故治部少輔信栄十三年の佛事にいとなまれし次に中に

初秋　法の庭秋のはしめもあはれなる結ふ露

哀傷　いかに八十のとせよみし夢は覚ても覚ぬ涙なるらむ

廿の年大覚の時も詠よみのありしに

初秋日　涼しさも秋は秋の日の色こそ猶の露にもあれ

見月思昔　まの前も都かとしもへよみをまくらに月こそ見え

見恋　よそにつゝ待へて涼しむ人となつかしん

夢談故人　いにしへは夢ぬる人の夢のうちにいはひの世の中てかたらん

サムね寺坊円秀月次に

萩告秋　いつしかと宿の萩にまづ見えて秋のけしきのあさき浜風

嶺稲妻　さしもなきもゆる光はつまにもふきさそひ峯の雲の稲妻

秋恨恋　枯れゆくもむらさきの葉をまた名を秋の葉に埋まで

早秋　袖にまづ入るそよぎの秋風は露も草木やうつしへそむらん

惜月　明けがたの月やかへるもあかずして見ん影にかこつ風の実は宿れる

田里　ほそ田のみと稲ささちり人はいぶの女ら門の出て稲もちらし

八月五日修理大夫の家の月次にて

秋田　かさよりもみえし穂ならで皆刈りて稲葉そその小田の小遠

暮天月　やすらひぬ月なき秋の夕暮もうきを雅しぬまし旅人

泊月　入江にはこぎぬるあまの梶まくらあけのそらに船

当座
月前竹風　色かへぬ竹の月もつきそへぬ松の嵐の竹をそよかせ

寄雲恋　夢とよにつかやすくいはむのかるもかなくも見を涙もえん

山村烟細　絶え絶えにたつる烟を山ぶかの里のはにみるほどまかなし

八日中納言のもとにて月次に

早秋露　あらためて涼しさもちる露のままさ袖に秋の初風

共忍恋　つつむとも誰なかなかみえん涙はつのきをさなうそらまくかや

老述懐　老の涙よそながらくる涙むせびしもしらくかしみでつつむ

十日右近衛佐の家にて

織姫契久　天の川なにかはしと昔より契りたえぬ星あひの空

忍難逢恋　はやきつよさ(?)ける小舟にまつ(?)ほどの世の中にかゝるはなにしおもし(?)

懐旧　老ぬれは夢さへ昔恋わたるいにしへ思ひし事は見えなく

廿日草庵月次ニ

旅店聞雁　ころもよ(?)ふしのかりやにまとゐしはらつ雁縄の宿の一声

貴賤憐月　詠るもはかなき身もちかはりなき月にはなし秋の夜の人

山寺懐旧　寺ふりて昔のまゝのかはらぬを仏にむかひておもひあはせけり

當坐
古砌草花　秋もなほふるきみぎりの秋の露下葉ゆふへの花そみたれり

祈空恋　祈りし契も中をへたてつや神のこゝろのつらき乃海士の釣

山家　住なれてうき世のことをはなれぬる嵐は声を松に残して

廿一日刑部大輔の家にて月をさそふ(?)

初秋萩　ときのまに今朝の風のふくからに秋きぬるやと露こほるらむ

海邊恋　人心あらき浪風さわくまにうらみてよする(?)つもるうら舟

山家鳥　袖ぬらす竹のはやしにたつ鳩のこゑも悲しき秋の山里

安居院大宮常光院にて雨中人々詠み侍けるに

洛中月　秋風も吹て白河の月の夜はむかしのみやこのこゝろやつさむ

浅茅月　やとの庭はあれてすめる月かけの夜半の宿人なかしかるや

契恋　秋の色の契の露の結ひ置て末は忘るなまつはかるらむ

山松　峯の雲をさそふ嵐にかよひきて松やふるらむ我住めは又

廿六日寺坊円秀月次ニ

山家秋夕　世のうさもみぬはよその住む山の夕くれ秋のこゝろなき哉

雲間残月　雲まのかた月ハ明かたの光まよへる雲のたえ間より出し大
経年祈恋　とし月をへて祈る年の恋のかひなきを祈るとよみて祈るもむ
月契秋　契りは名をいひかけて雲や月と秋の中をちぎるなん
悦偽言恋　うれしきことをかへすのもまた千さとはかなきあはれつく
燈　かすかなる光のむかしの帰のうちにみえぬまたさき灯の影
去る十五日より将軍家よく光源氏の物語読進
に及ぶされし飛鳥井中納言雅親卿家にて此日
開白し侍るとかやしまひしは八月十日頃
ひ毎の持病おこりてまゐらせぬぞの朝
治部大輔義健むかしく遠侍なるし小内小室之

家卿の影をかゝせてその名を只くもらくらされ
しふしのみのうへく祝言をまつくおなじく彼々の
おもとへくとゞめる
是は人むかしは八ゆきをとりのそのもかみ住吉の松
又住みより四枚屏風に四季の鳥ども書るかなを
よみくだし紙によみてもかきて書し侍るとかや
春　雉　子をおもふ雉子のなく声も雉をおもひ出へし
夏　鴨　あふみなる入江の芦の夜のもちもおもふ鴨の村立
秋　鴫　しきたつ秋の夕暮の鴫の羽音も数さかなき
冬　鴛　鴛のうき池のうへを契りつゝ只ゐるめぐりの名がく

廿日草庵の月次延引せらるゝ師なから

秋植物　朝露ハまつ木に落くもし蕉露ありのミ風もなし寺

秋動物　あらし吹森の下露こほれて松虫さへ鳴ぬ声をや鳴か

秋雑物　橋姫のかたしく袖ハ深けれハ山もおなしの秋のさころも

当座

峯帰雁　これの川霧のたちふかくもして嶺より落るまての人今

梯霧　誰とてむ嶺のかけ橋の霧も間よりこえての下か世

谷樵夫　行さそまてゆふる生業をおもひやる谷や我宿も嶺の山路

廿九日治部大輔の家にて釈阿の影を此の世の家
にのたてく説くともしつくしあかしに浅くきこえし
侍らし円寂の後よりとてゆゐさんあかしく合龍すいせし

らもこゝとなりて

清むまの身のするを祝しく九十たらひゆきとある花山のを

九月九日予より十二家の書なりきし也をぬ伏見院の
御所つまつ清より後萱御所なりくのまかりしまつりし
その御前の庭よりまのをしたる菊ゆかの菊なといへ
るよりもかしたまひあかしくみるまゝうつくしく侍
いつまた此程おもんしと尋らしもつひのことも侍
らて四十餘年を侍るつり或人の佛をせしに
佛の御前にかさねて一手の此心をたてまつりて
家あるしに尋しかハ此菊尾張の国々田とかいふ

よそのつとしを只一本まうつしうゑ侍るとて読るとかれ
しくも思ひよりてさかしくして春日西洞院の草
庵の庭にうゑをく三年の秋と人はかりつくし枝を
みんにも哀にさめ侍りきさらくいはくをみるにも
けふむさしにあらし廿船よつもたきまこと中将菊
の名（ときさ一本）にはなくへつもなのとやらくおもむくるに短冊を侍
けるく一本うつしもねらぬをしけ十六年七年まもなきぬ
らんのし享徳元年九月九日右兵衛佐雅世
しをはつきて侍りしまゐらせし
天も文をつゝあらはし君か世の中に我もひろめつる菊の一本

返し
移しうゑて君かもと侍めし一本の千代まで詠る我世の白菊
十三夜ある所よりまいりて廿首の歌をかきくへてその中の月を
よみくしあつまりしはよみしきり侍る
九月十三夜　かきつみし八年八十月の月なれや秋如月の形てしは月
同夜右兵衛佐の家にて廿首歌よみ侍しに其うち
三首おもひたまへけるに
翫月　老の坂のこえてくる道をわけても月をつきぬよもすかし
故郷月　むかしより世の人のあすして詠むえて久しかるふるさとの月
寄月旅　わけまて里みえても宿に移月よ所はいはくよの埋ける

廿日草庵の月次なり

秋庵　山陰や庵のなかさ秋ぞしる露の垣にあはれ添ふらし

暮秋　尖よりも秋ハもみぢの落つらをさそふ嵐にかゝる糸すゝき

疑恋　まつらるゝ人の言のはつゆのまに我もまさつゆめのんとこそいのる（えの歟）

幽山月（當坐）　秋ふかき嵐をさへて木のまもる月よ流るゝ椎の葉をとつてゝ

踈屋蔦　松柱にしき蔦まとふ影のも月や風よりよせてあるゝ庵かな

悔前世恋（恨歟）　身をいそへくせまうかよ世も物やうきゝけのんを涙川の流

秋窓燈　あき風窓の光ハそひて秋ハおそく小車まさひ法寺ね八

廿四日明栄寺の月次なり

浅茅月　拂つも涙露不吹茅ハあれんく陰もろやとの秋の也

夢後見月　覚てみる夢も昔の秋ならし夢の面影月にうつりて

鷗浮水（歟なし）　寄波も堀江のかもめ飛るをさそひし常の浮や恋つゝ

荻掩水（當坐）　涼しさに荻の下葉の一枝川のさゞ波ももものにさそふつゝ

秋海辺雲　立田姫その姿も及ばしけさの京秋の山もみぢのふもとの霧に

秋夕橋　行きかふも誰も涙にむせつ川の橋さへぬるゝ秋の夕霧（夕歟）（ふり目上）

廿七日　右の人々もなかひく右の家に庭のもみぢ盛（一本）

なりけるに車よせてくるゝまで夏右馬助成賢卿

弟事にまかりたりしに一読ありしく三十首の

題を出し侍るに

初紅葉　秋ふかきくれのその初瀬を横にひとくも世流のもみぢする

浦紅葉　山本のあらのさゝ舟絲汲にみちくるしほやうらのもみちを

紅葉増雨　いく入にたえるもみちを雲に時雨して付るゝ人の袖も

廿七日平等坊円秀月次に

蔦風　松やまるかゝる蔦の花さくへ木も風の秋めくるかな

夕霧　秋の色の浦もえて埋むらん夕の霧の下のやまさと

故郷　住すつる人の宿にし数よりはあはれさそふ露のやとる月

當座　終夜虫吟　鳴ちるや袖にも月の秋をもとめて鳴むしのこゑ

宮の黒蔦迦　みさはしさらぬ山におとる里てつらきあはれの根を

戸外松風　風わたるよるも床おく松の木にぬるゝ付るの苔乃衣手

廿日あまり修理大夫の家にまうて読侍し歌に

湖初秋　かゝるさゝや松にはさへゆる秋の色しらてそすまぬよにのみちうかせ

月照草花　くまなきてる月に下ゆくも数さへぬ秋のゝ草のさほの風

稍傾月　待わひむもたゝんてもや恨むかんかたふく月の須末の山

暮秋懐　清るをそくまもみつるその日にも月の末の露

九月ある右兵衛佐の家の庭に菅笹の苔の庵ときく

てくにてく歌あるらしかて

秋暁露　松の枝りしら露まことの色をなかさる苔の庵の下

九月盡　名残の夕のやまやつる秋をえはくみ惜めらのさら

秋尋恋　雲霧の迷はまてもまた宿てさておもひけも松まるくをよ

秋閑居　世をもこのくさる松もあらしかやみわれの松のあらしに

十月二日三井寺佛地院僧正長吏の坊にて小別当
承のもとを見侍るとて出雲寺にて雨ふりて人々よみし中に

祈身恋　あふことのかたきなりぬ恋しもあらはれてや祈りこそせむ

寄灯述懐　たてし世をのかれのやみの夜の我をさらすの末の灯火

三日同坊にて歌をよみ侍りし

山家時雨　冬は猶人めも草もかれぬるの宿を見すて時雨ふりてさびしき

寄夢恋　ますかゞみ見し面影も別れて見えぬ夢の中なる我こそはあはれ

江上見鶴　かくふきに江の小菅乱れ芦の末葉にむれゐて田鶴ぞ群ゐる

四日同所小院如法堂にて歌をよみ侍りし

湖氷　鳰の海やあさき汀の里さびし氷ぬるよ舟もかよはぬ

暁雲　清滝や天の川原に立ちて見るみかはぬ宿をあけゆく

松　住よしの松のみどりかはらぬものか合すなき世の道

六日仁和寺蔵勝庵にて雨ふり修理大夫入道同行に侍りて

月照網代　山のはのもみぢをてらしあかる木にいさよふ月やみる白浪

歳暮梅　暮るゝ年をやすらふ宿の梅が枝に入るまでの春の匂ひを

冬古寺　古寺のしるしの鐘の音さえて嵐もまさる軒の松風

十三日明栄寺の月次に

屋上霜　月影さへ板屋の霜のむすほれて消えぬ夜の間の

冬田氷　小山田の落葉の上の薄氷枯れても残る秋の面影

旧事恋　忘れじの言の葉のみぞ残りける昔をしのぶ袖の涙に

當坐
寒月　時雨の雲の空のふるえに氷とさゆるみそらの月

稀逢恋　契しも空しくなるかあふことのまれにもあかぬよはもある

暁雲　わかれくもあかつき人の心なき山路にかゝる横雲の波

十七日ある人の家の月次

暮山木枯　木葉ゆゑ暮さそふ山の木枯も残るもなき峰の松原

月前千鳥　浜千鳥夜の雲の晴まに月に鳴くなる声のうちさびさ

雲浮野水　まかせじふきさ野沢の水にうつる雲のさまよふかげ

當坐
戸渡千鳥　浦わの千鳥のこゑにゆふなみやうらぬ夢のかへる舟人

難忘恋　あやにくに忘れんとすれば思ひ出て人やりならぬさよの俤

原上行人　いく原かけて里をもまろうど人の袖の露

十九日大光明寺の月次に

椎柴嵐　紅葉ちる椎柴の袖さへてみねの嵐の音ぞふくらん

水鳥少　鳴きしのみぎはの水鳥もなくて氷にせばき庭の池水

寄衣恋　山かつの衣とふ人もなき恋の涙や床のさむしろ

當坐
夕野雪　暮るゝまも野に消ゆるかたちのまだぬれて雪の降る路

ナヽ箕
被厭恋　かくまでも人の心のうきはなるぞのやつるみつ波のそでとまくらん

箕ナヽ
雞鳴過関　またきの関路わけゆくもまだ夜ふかき里のしるべ

廿日草庵の月次にて

時雨　みやまべの八月までつきて山めぐる時雨もなれぬ袖のしぐれて

寒夜水鳥　ねやさむき氷をさゆる小車のかもめなくなく波の川なみ

山路篠　里ちかきさゝふる道の山路しかしけりなその末の白さき

當坐
河雪　ふりつもる川辺の雪にあとかたもなく波絶々あと絶みゆ

遠恋　君そうきさて逢もえぬ唐土も遠さかるよの秋つ島人

田里　秋はたゝ秋八田面をとる庵のみそ我すむ里のさとゝ人

廿二日刑部大輔の家にて続歌ありしに

時雨　草木にかゝり時雨を渡る冬の日のぬるゝ袖なる紅葉ぬさに

松霜　子の日木も霜のかゝりしに見る名のあるをいはへる松のみとり（みとり一本）（つれなき歟）

暁雲　明ぬるにはかひの山なしぬ雲もみえてまかる雲の山路に

廿三日修理大夫の家の月次に（みくるまとゞめありしに一本）

閨寒月　閨の内に清るやいた板まもる月の氷のうちにみえの影

寄鏡恋　みるみる人のかゝみの水かゝみ面影うつる猶そたえけり

旅宿雨　宿ことにあすの山路の雨つゝみあはれの旅やそてぬれし

廿七日平等坊円雅の月次に

河千鳥　しはしはゝ富川風にさはきてその音もちるちり千鳥なくなる

竹上朝霜　竹のうの月の影まては消るとや折る竹のまさゆるあさの風

行路市　まさこなるまちを人もとゝまらて絶ぬ市場のあくる山路

當坐
冬暁天　風さえて暁寒のみちくる小笹の原たなひく冬の雲のはて

冬水郷　冬されるさとはやめてる衣手に雪ふる中のあまの川きのほ

冬旅行　立てよるとものゝやのかき出はるゝ中の雲をあらそふとて

廿七日右京大夫の家のところに

落葉深　冬枯の庭の嵐吹たえて水なき渕となる木葉かな

水鳥遊藻　みだれ浮藻をかつて鳴鳥ならさでやすむ水の上の鴨

寄車恋　手かきたえぬ我かよう吹風車めぐりあふへき契りありけん

名所市　あふの市に民よりも老の坂こえての世に住んくるしさ

十月五日修理大夫の家の月次なり

遣水氷　石たかく鳥の音たえて水の氷よりも深き庭のあさ霜

風前雪　みくし山寺さとめくる人待に風の跡をまかするそのまし

寄絵恋 當座　思ふ情の文絵の如く薄墨くちやまの絵のまつも告つき

山霞 當座　まだ霞む天の空まで思ふとて雲よりおぼろぬかの四方山

隣砧　一もとも知らぬ宿にて誰ぞえん垣にハ人乃あさかぜの音

野宿　秋の露稲葉の夢のやどりさえあさの大原の萩のかりふき

廿日草庵の月次なり

寒閨月　板まあらみ閨なる月ハ冬ふかき夜の霜のむしろ清

船中雪　あさ日の湊へ入る友舟ハ数しらぬ雪の泊の舟

寄燈恋 當座　今宵も消なんとする灯の光まさる秋くの思ひ哉

餘寒春月 當座　さゆる秋の空の雪ハ猶さえて梅のさかりに霞む月影

虫催涙 当座　草のかすかなる露の露をふに我住宿とむしもなくも

寄鳥恋　世をのかぐかなの中に鳴るのをまくまてる掛ご誰と思ふらん

関路雨　浪の上の雲そたなの島めぐるもちまの関路ハ雨のうちつく

廿一日刑部大輔の家よりて読ぬあさし小

冬岡風　漕出る時もしらぬ舟を船岡やいつまて雪の追風

冬江月　難波江やよするさゝ波月の玉柄もとめぬ氷とそしく

歎無名恋　なかなかにみるめもかるぬなき名のみたつ袖の浦波

遠村鶏　鳴声はまた夜ふかきにもあけぬとや手飼の鳥か遠津里人

廿二日ある人の月次会

枯野曙　冬枯の野にあはれは有明や霜にむかへの鴫の鳴こゑ

連日雪　きのふけふふりぬる日数ふる雪のつもりて深き谷のあさかる

恨世恋　松浦さへ世をうらみむすふ手枕にいかて出ん秋の夜の人

遠近炭竈　蘆の焼煙見ゆるあたりも遠近にやくなる出る山の炭竈

旅人休橋　つかれ来ていこふ木陰を頼みつゝ橋にやすらふ四方の旅人

待空恋　露おきて夜もよるもなきあはぬ夜をまちうかりける秋風

廿四日平等坊円秀月次会

雪　雪積る垣の下葉も皆埋もれぬ松なれは埋むたまの小野原

薪　こりつみし薪つる山にふる雪は消すもあとの雪のつもらん

恋　人知れす思ひそめしもうつりかに人しらぬ身となせるよ

初冬風　風の音の嵐の外はせるよりも雲さそひやられのまゆめなるらん

山路霰　みるみるもしみかけつゝ衣の色もはらはらぬ夜の山路

寄湊恋　かくれなき袖に涙のみなとより波の寄るらむ

故郷路　住人もなき古郷の道すからたゝ忍ふ世の

廿九日修理大夫の家より定家卿の新借書によりて一座

あはれ一首懐紙に

雪中遠情　大和歌の道にいりてさかひことの葉をしるしよ

同歌　法楽の歌の三十一字を冠におきて

志　ちるをやきえし山のまにまにうつりゆくなみの袖にまたもあはれ

春

冬　そなたに…をまちつゝ君をまちわたる雪にも色ふかき

晦日明栄寺の月次に

山寒松　深山の松は秋よりちりつゝ猶あらしさむき風

野亭雪　さとのやのその垣根のほとりの風をも…雪埋むなり

当座

名所濱　こぬ人をまつよのさとの浜によする秋の浪をかけつゝ

早春雪　まつのはるのしらゆきに…あはなる山の…しらゆき

見月　雲ゐにみえたる秋の月に…宿にやすらふ

寄柏木恋　あはれ世の契を誰よりかはしのぶ柏木の葉のかげにのみそなき

孤舟　さむしろにひとりのみねの雪の浦にぬるなみの袖はしほれて小舟

十二月六日大宮常光院にて人々あまたよみし中に

深夜聞霰　よるの窓にうちもねられぬ霰やさらに人の夢

寄藻恋　我ならぬあまの人めもしのぶなるさらに藻刈の小舟をかくしつゝ

小舟の一本歟

孤島松　浦風のあやなくもなれにける世にやまた小島の松の一本

懐旧催涙　思ひきや昔の人やなつかしきなみだかゝる袂

十一月得河子丈の家の月次に

爐火　さえさむく冬のよの埋火の月かげさえて窓の月影

歳暮急　とゞまらぬ年も程なく暮るゝきのふはけふに数ならぬらん

杜柏　松木の葉しぐるゝもいつとなく杜の緑の色を待らむ

海辺松雪　雪ふりてそ網をもそへ浜松の枝さへおもく延せの浦風

立名恋　めぐりあふ空の行末はいつまでか立名のうきのかくれなからん

草庵　かりそめに結びし柴の昔にかへる庵やあはれのつゐのすみかなり

十一日大光明寺の月次会

氷留流水　うち川や氷のくさびつなぎつゝ水の車をたえてめぐらぬ

歳暮炭　かきみるや明なん年の炭をつむ年も程なく切火ある也

鐘声何方　音ばかりあまたの寺を分けば山風のおとづれあやなぬ浦のあらし

冬暁霜　明そめの月もかげさむ鵲のわたせる橋の霜のふかさに

寄瀬恋　山河や早瀬にせの名をもらさじと名をたつる浪とこそ見え

羇中眺望　旅人の坂をこえ来てみるまゝに果なき海にふりの白雲

十五日平等坊円秀の月次会

爐火煙　焼きしくも立つる煙のまぎれつゝ家の炯にかくれて床の上つる

冬早梅　年の内に咲そむ梅の香にそめていざよふ花の数はかり

暁眠覚　起出て明るとも見えぬ寝覚めの床にかゝるもの思ふ夜の

時雨交風　山颪の風も時雨の音そへて吹こゆる松のしぐれのちりぢり

江残鳫　出かねる入江の波の梶の音におのれにかへる鴈のつれなさ

寄芝恋　一夜づゝ忍ぶ思ひも九重の雲の上なる芝生のもとに

山館竹　庵むすぶ竹の林の奥なれば思ひあやなき山の上岸

十四日右京大夫家にて諏訪法楽の百首のうちに

春雪　むらくにきえてはまたふるゝれの雪けの空のあは雪

首夏　ゆふされは月のかけの下かけにまたのこるはなのにほひ

湖月　にほのうみ秋はさえわたる月影にゆるさぬ波のこほりみ

初冬時雨　神な月今朝はしぐるゝ雲ともみぢをてらす時雨

寄橋恋　かよひけるこひの夢のうき橋もふみみるはなき人もなし

島鶴　ますかゞみのかげにあふ千とせかぞへてもちよの秋つ島

廿日草庵の月次に

神楽　さかき葉にかけゝる月の影やさやかに

早梅　咲やかて鶯の梅をまつはかけのにほひ

釈教　このまゝをぬ人の仏の名をきくは法のおしへなりけり

古屋霞（当坐）　よもすからあれにし神のみやゐも霞の中

待空恋　とはれんとたのめしよゐをわすれてまつ月もかたふく

柏　山かけのみちもかくれぬ柏の木の下かけ

廿二日大膳大夫の家にて法楽の百首のうちに

立春　むかしにはかはる人あまた都のうちに春やたつらん

花　咲きにほふはなの色をみるたびにこそ身のさかえの世

盧橘　花もまたちらで待ちみるかや花南の風のにほふ宿

秋夕　ゆふくれに野はらのゆふかの葉とこそ秋の色

月　いかにせん月のみちよの空の床さへもの秋風

落葉　影の面ちるもみぢ葉のかゝるにぞいはまも似ぬさゞなみの糸

恨恋　ふかしともこのもかも袖子のまくらさらぬの汀ぞ

釈教　法なるゝところ捨ていとゞおほしいとはれぬ法の時ぞとしなかき

廿三日修理大夫の家にて読むのあるじに

初冬　夏衣今やうつるらむ後人の着るをはふみのくるゝに

神楽　さとよあはれおもかなぬきめの月に今のまたは湊田鈴

寄岩恋　手にふれかさゝ岩のくさとも色あるをも恋してとゝほし

田家鶴　山田守る縁の上なる秋刈れる松なきぬ日もあらくかの鶴ら

廿五日右兵衛佐の家にて読むのあるじに

冬夜氷　氷ゐる岩中に今宵こそまりても睡ねの宿や寒くさ

寄涙恋　水ゐる水にさへも見ぬ君のうさふ何の涙もかく流らむ

古寺燈　初せ山うちもさとやいとゝきの仏の照見えずなるらむ寺

丹鶴叢書

図書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan